

中国古典文学大系 15

平凡社

詩經・楚辭

目加田誠訳

訳者紹介

目加田 誠 めかだ まこと 明治37年山口県生。東京大学文学部支那文学科卒。文学博士。専攻 中国文学。九州大学名誉教授。著訳書「新釈詩経」(岩波書店)「屈原」(岩波書店)「杜甫」(集英社)「唐詩選」(明治書院)「風雅集」(淳信堂)「洛神の賦」(武蔵野書院)

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

中国古典文学大系 全60巻

詩経・楚辞

第15巻

昭和44年12月5日 初版第1刷発行
昭和52年5月10日 初版第6刷発行

訳者 目加田 誠

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中 邦彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区
四番町4番地 株式会社 平凡社
振替・東京8-29639

不良本のお取換えは直接小社サービス課まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい。(送料は小社で負担します)。 製本 株式会社 石津製本所
定価は外箱に表示してあります。

© 株式会社 平凡社 1969 Printed in Japan

目次

詩經

國風.....三

周

南

采	麟	汝	漢	芣	兔	桃	蠡	樛	卷	葛	閔	南			
芣	采	之	墳	苢	置	天	斯	木	耳	覃	睪	風			
三	三	三	三	二	〇	九	九	八	八	七	六	五	四	四	三

邶

風

簡	鹿	式	谷	匏	雄	凱	擊	終	日	燕	綠	柏	騶	何	野	江	小	標	殷	羔	行	甘	采	草		
兮	丘	微	風	有	苦	雉	風	鼓	風	月	燕	衣	舟	虞	彼	有	汜	星	梅	其	羊	露	棠	蘋	蟲	
三	三	三	元	元	元	七	六	五	五	五	五	三	三	三	〇	〇	九	八	八	七	六	六	五	五	四	三

東	鷓鴣	七	下	鳩	候	蟬	匪	隲	素	羔	檜	沢	株	月	防	墓	東	東	衡	宛	權		
山	鴣	月	風	泉	鳩	人	蟬	風	有	冠	風	陂	林	出	鵲	門	門	之	門	之	風	輿	
二四	二三	二〇	二〇	一九	一八	一七	一七	一六	一五	一四	一四	一三	一三	一三	一三	一〇	一〇	一〇	一〇	九	九	九	九

由	南山	南山	南	華	白	南	魚	秋	出	采	天	伐	常	皇	四	鹿	鹿	鳴	之	什	小	雅	狼	九	伐	破	
庚	有	有	有	嘉	華	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉	嘉
二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二〇	一九	一七	一五	一四	一三	一三	一一	一〇	一九	一九	一八	一八	一八	一八	一八	一七	一六	一六	一六	

雨無正	十月之交	正月	節南山	節南山之什	無羊	斯干	我行其野	黃鳥	白駒	祈父	鶴鳴	沔水	庭燎	鴻鴈	鴻鴈之什	吉日	車攻	采芑	六月	菁菁者莪	彤弓	湛露	蓼蕭	由儀	崇丘	
.....
一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇	

車擊	頰弁	鴛鴦	桑扈	裳裳者華	瞻彼洛矣	大田	甫田	甫田之什	信南山	楚茨	鼓鍾	小明	無將大車	北山	四月	大東	蓼莪	谷風	谷風之什	巷伯	何人斯	巧言	小弁	小宛	小旻
.....
一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九	四〇

青蠅

賓之初筵

魚藻之什

魚藻

采芣

采芣

角弓

苑柳

都人士

采芣

采芣

采芣

采芣

采芣

采芣

采芣

采芣

采芣

采芣

文王之什

文王

大明

大猷

大猷

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

旱麓

思齊

皇矣

靈台

下武

文王有聲

生民之什

生民

行葦

既醉

鳧鷖

假樂

公劉

洞酌

卷阿

民勞

板蕩之什

蕩

抑

桑柔

雲漢

崧高

烝民

韓奕

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

殷 長 玄 烈

武 堯 鳥 祖

二九 二九 二九 二九

九 天

九 離

悲 思 抽 惜 橘
回 美 人 思 誦 頌
風 人 思 誦 頌

章 問

禮 國 山 河 東 少 大 湘 湘 雲 東
魂 蕩 鬼 伯 君 命 命 夫 人 君 中 皇
一

歌 騷

楚 辭

二九 二九

遠大招漁卜

惜懷哀涉

遊招魂父居

往

解原

說詩

日

沙

鄂

江

四九
四〇

三二

三五

三六

三七

三九

三六

三六

三六

三六

詩^し

経^{きょう}

目^め
加^か
田^だ

誠^{まこと}
訳

国 風

国風は各国の民謡である。これには次の十五国風が収められる。
周南・召南

これは周の音楽師が、周の南方一帯の歌謡を採って来て、朝廷で奏したもので、雅頌の音楽に対して、一種民間調の楽曲であろう。

邶・鄘・衛

実はみな衛国の詩。今の河南省黄河以北地方。

王

東周の王都。すなわち河南洛邑を中心とする地方の歌。

鄭

今の河南省新鄭地方。

齊

今の山東省の大部分を占めた国。

魏・唐

今の山西省の地方。

秦

西方の蛮族がもとの西周の土地にはいつて諸侯となった国。陝西省。

陳

河南省陳州。

檜

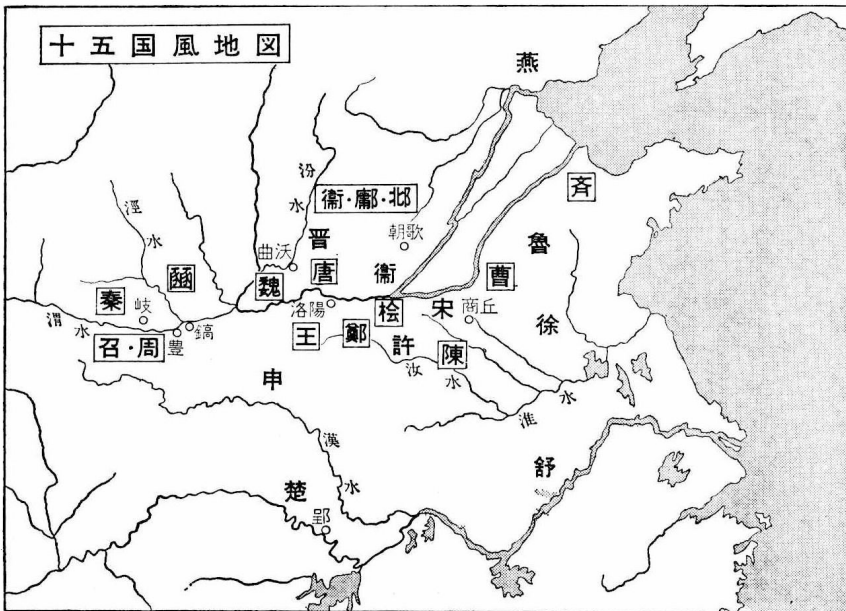
河南省密県。鄭に合併された国。

曹

河南省曹州。

豳

十五国風地図



陝西省邠州。但しこの部分については後述。

以上大体において、黄河流域地方を主とする。各国の順序については、いろいろの説があるが、私はこのうち、周・召の二南は周の朝廷で奏された音楽で南の名で呼ばれたもの、次の三衛の詩は、衛国の歌が、魯や晋で早く習われて集められたものと思う。ついで各国の歌を採録するのには、やはり王風を前においたらしいが、あとの順序はわからない。最後の豳風は、実は魯の先祖周公が作ったという説を伝える七月の詩と、それに同じく周公伝説に関するものとして魯に伝わった、いわれのある古い歌を併せて、豳風の部に入れたのではないかと思う。私は今の『詩経』の編纂されたのはやはり魯国ではないかと疑っている。魯では叔孫穆子という人などがこゝに賦詩を流行らせた。彼が政治的に活躍していた頃、南の呉の国の季札という者が魯国に来て、周の音楽をきかせてもらったことがある。そんな空気のなかで、諸国の歌はだんだん魯国に集められてきたのである。

周南・召南

後漢の鄭玄の詩譜によれば、昔、周の文王が豊に都し、岐山の南を分けて周公旦・召公奭の采地とした。そこで二公の徳化が岐から南國に行なわれた。武王が天下を平定してから、これらの地方の詩を、楽師に集めさせて周南・召南と名付けたという。

小雅の鼓鍾の詩に朝廷の音楽のさまを歌って、

鼓鍾欽欽 鼓瑟鼓琴 笙磬同音 以雅以南 以籥不僇。

というのに、毛伝は注して、東夷の楽を昧といい、南夷の楽を南といい、西夷の楽を朱雉といい、北夷の楽を蔡という。と、『礼記』明堂位にも、また『孝経』鉤命決というものにも、南蛮、あるいは南夷の楽を任(南と通ずる)というところがある。四夷の楽を併せていうのは後世の考えかと思うが、

この小雅の詩で考えられることは、中央の雅楽に対して、南とは一種別の楽曲である。今二南のなかに、漢広、江有汜のような詩があるところを見ると、やはり周の南方に起こった歌およびその曲調をいうのであろう。また周公・召公の南方に起こった歌およびその曲調をいうのであろう。右に分かれて立って、天下を分治する形を舞うところがあったらしい。この二人は並んでともに周初の大事な人物とされた。そこで南の歌曲を二部に分けて、それぞれ二人の名を付けたのだらうか。ことに召南とされたものなかに、召伯(これはいつの時代の召伯か不明)の徳を詠うものもあるから。

この南という楽は、もともと民間に採った歌である。だから周が東周に遷って後にも、王室の婚礼を祝する民間の歌の一つである何彼穉矣の詩がこのなかに加わって、やはり南の一つとして収められたのだらう。これは地理から言えば王風にはいるべきものだが、いわゆる王風が、洛邑地方の歌として採録されるよりも前に、すでに周室の音楽に採り入れられたのだと思う。

なお旧説では、これら二南の詩はすべて文王の徳化を被り、人心正しい風俗のなから生まれた詩ということになる。ことに二南には男女の相思を歌ったものも多いので、古来の注釈家は、聖人の化は、まず家を齊え、夫婦の道を正すところから始まるということと解釈し、周南は后妃の徳、召南は諸侯夫人の徳を歌ったものとして解している。朱子もこの二南においては、やはり文王の徳云々に拘われたのか、せつかく無邪氣な相思の歌をも、大夫の妻が夫を徳ぶ美徳の歌というように強いて解したのである。

周南

関雉

関々んとつれなく雉鳩は
河の洲に

たおやかのよき乙女こそ
君子の好き伴よきとも

長き短き水辺の苜蓿みずべ、あまきまほほこ

左や右の流れに采る

たおやかのよき乙女は

明け暮れに思い求める

求めても得ねば

思いの明け暮れに

あわれ あわれ

夜もすがら寝返りする

長き短き水辺の苜蓿

左や右に采りもてゆく

たおやかのよき乙女は

琴瑟ひいて友しもういっせ

長き短き水辺の苜蓿

左や右に苳まび采る

たおやかのよき乙女は

鐘しよん鼓こもて楽しませう

河の洲につれ鳴く雌雄の鳥を歌って、君子と淑女がよい配偶であること
を言ひおこすのは、興の体である。よき乙女を明け暮れに思い求め、も
しそのひとを得たならば、琴瑟鐘鼓の音楽を奏でて、その心を楽しませ
いつまでも仲よくしよう。これときわめてよく似たものに陳風の沢陂の
詩がある。沢陂も同じく寤めても寐ても手につかず、輾転枕に伏して、
ひとり涙を流すという、切ない恋の心を歌ったものだが、この閔雎の詩
は、それとくらべると、同じくひたすらな心を詠いつつ、その思いを静
かに美しい敬愛の心にも高めたものとして、孔子もこの詩を評して、
「閔雎は楽しめども淫せず、哀しめども傷らず」といった。楽しめども淫
せずとは、楽しみに溺れぬことであり、哀しめども傷らずとは、わが思
いの哀しさに、わが胸を破り、心を乱すことである。恐らくこの歌は、
樂師が朝廷での演奏のための歌詞として、一段と形を整えたものであろ
う。孔子は、閔雎の音楽の美しさを批評して、洋々として耳に盈つる哉
といった。その音楽の美しさは今や知るすべはないが、歌のことばの調
子の高さは、国風の最初におかれるにふさわしい。毛序にこれを、后妃
が嫉妬の心なく、わが夫のために美女を求めて得ぬことを愛える詩と解
するのはおかしい話であり、朱子が、文王の臣が、文王のためによき妃
を求めてやまず、遂に聖女妲己を得て、その新婚を喜んで作ると解した
のも、文王云々に拘われた迂遠な解ではなからうか。

一 注

雌鳩 雌鳩は魚鷹しよまう、うたなといって、魚を捕って食う鳥。この鳥が雌雄呼び交わ
して魚を食うさまを歌って、君子・淑女の佳配を興する。なお、魚を食
うということば、男女の結びつきによく出ることばである。

二 苜蓿 苳ま草。和名あさぎ。

葛かつ 覃たん